
高みを目指して

ユキアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高みを目指して

【Nコード】

N3755V

【作者名】

ユキアン

【あらすじ】

レイト・M・テンリュウとエヴァンジェリン・M・テンリュウは多くの愛すべき人を残してこの世界から高みへ行ってしまった。彼女らは再び出会う為に彼らが居ると思われる高みを目指して、各々の根源を探す旅に出る。

以前から書いている高みを目指してシリーズの改訂版です。ノロノロの亀更新です。気が向くと坂から転がる様に連続投稿する事も。

エピソードからのプロローグ

side other

極東最大の霊地、その中心にそびえ立つ一本の大樹。名を蟠桃という。かつてここには都市が存在していた。それも世界最大の学園都市だ。だが、それもたった一日で壊滅的なダメージを負い、規模が縮小され、人がほとんど離れていき、時が経つにつれてこの島国が環境保存の為に解体された今もそびえ立っている。そして、その大樹の上空に3人の男女が浮かんでいた。

「まだ零樹は来ないの？」

「あまりここには長時間居たくないからギリギリになってから来るらしい」

「やっぱりまだあの事を引きずっているのでしょうか」

「……仕方ないわよ。一時期は危なかったけど今は、ここや魔法世界に行かない限りは落ち着いているんでしょう」

「ああ、それは保証する。先日会った時も変わりなかったよ」

「ならいいわ」

この地が彼女らにとって、どのような場所かは分からない。その後誰も話す事無く、ただじっと時が流れるのを待ち続ける。

「……時間ね」

金髪の女性がつぶやくと大樹が発光を始める。22年周期で発生する魔力の放出による発光だ。そして発光が始まると同時にフードを被った男が現れる。

「……久しぶりね。零樹」

「いきなりで悪いけどさっさとやろう。感情が抑えられなくなる」

「……分かったわ。それじゃあ、やるわよ」

金髪の女性の合図で4人は詠唱を始める。

それと同時に大樹の発光が弱くなっていく。

彼女らが行なっているのは大樹の魔力を利用した儀式だ。それがどんな物かは分からない。

やがて儀式が終わると4人の目の前に一つずつと4人の中央に一つの宝玉が現れる。その宝玉をためらう事無く4人は飲み込む。

「これでこの世界でやる事はなくなってしまいましたね」

「そうね。だけどこの世界よりも私達は求めるものがある」

「覚悟は出来ているかい」

「愚問だな。オレはオレである為に、彼女との約束を守る為に神になる」

「なら、行くわよ」

残っている宝玉に4人が手を触れるとまばゆい光を放ち、4人と一緒に消えていった。

side out

side 零樹

目を開けるとそこは、何処かの森のようだった。

「どうやら別の世界にたどり着いたようね」

「そうみたいだな」

「それにしても零樹、口調を父上みたいに変えたのですね」

「ああ、いつまでも子供で居られなかったから。最近になってやっと無意識で話せる様になる位にはなったけど」

「話はそこまでだ。何かが近づいてきている」

その言葉と同時にバラバラに木の陰に隠れる。そして気配がする方を覗いていると、水色の丸い生き物が現れた。

「零樹、あれはまさか」

「ああ、ドラクエのスライムだ」

「あれがファンタジーにケンカを売っているスライム」

ここで少し説明になるが、ファンタジーの世界の中で強力なモンスターは何かと聞かれれば、それはスライムだと言わせてもらう。ドラクエやFFのスライムは普通に打撃で倒せる雑魚だが、実際のスライムという生き物は流体であり、打撃や斬撃が一切効かないモンスターだ。もちろん弱点はある。炎で残さず燃やす、特定の液体をかける、大きな音をたてるなどの多彩な弱点を一つだけ持っている。それが本来のスライムと言えるスライムだ。まあ、目の前に居るスライムもドラクエ史上最強のマダンテを使える様にはなるから強いと言えば強いが断じてスライムだとは認めんぞ。とは父さんの談だ。オレとしてはどっちでもいい。とりあえず殺せば良いんだろう。

投影でナイフを作り出し、投擲する。

ナイフが見事に刺さりグチャっと言う音と共にスライムが飛び散った。そして残されたのはナイフと数枚の銅貨だった。

「とりあえずこれがゴールドだとして、問題はここがどのドラクエの世界なのか、あるいはゲームとは一切関係のない世界なのかを確認する必要があるな」

「そうね、それから私達がこの世界でどう動くのかを決めましょう。とりあえずは近くの魔物を殲滅してお金を稼ぎながら街に向かいましょう」

「そうするのがよろしいかと、とりあえず私が前衛、零樹とフェイトが中衛、姉上が後衛の陣形をとりましょう」

「その必要は無いと思うけど一応そうしておこうか」

さて、どんな世界なんだろうね。少しだけ楽しみだ。

s i d e
o u t

穴堀、襲撃、士官

side 零樹

とりあえず道らしきものを見つけて歩く事2日、ようやく街、というより城が見えているから城下町？に到着した。とりあえず宿を取りその日のうちに手に入るだけの情報を集めてみた。

「ロモスカ、ということはここはダイの大冒険みたいだな」

「一体どういう話なの？」

「世界の安寧の為に同じ時代に一人しか現れない竜の騎士と呼ばれる種族が居る世界。ただし原作では今代の竜の騎士がある女性と結ばれた事で新たな竜の騎士が生まれ、その子が主人公の世界。敵はお約束の魔王。ただし大魔王と呼ばれていてアホな程強い上に読者にも高い人気を誇る本当に偉大なる王様。最後は主人公に破れたけどそれでハッピーエンドとはならず、大魔王のライバルである冥竜王の部下が使用した辺り一面を吹き飛ばす爆弾から仲間を守る為に遙か上空に運んで、爆発に巻き込まれ行方不明で終了。大まかにこんな感じかな」

「なるほどね、それじゃあこれからの事を決めるけど何か意見はあるかしら」

「僕としては原作アンチの方向で動きたいね。これから幾つもの世界を回る以上修正力に関してはすぐにも確認しておかなければな

らないからね」

「オレもフェイトの意見に同感だ。世界ごとに強さが変わるかもしれないから一番最初に確認する必要があると思う」

「本音は？」

「バーンに付いてみたい」

「「はあ」」

姉さん達にため息をつかれる。分かっていた事とはいえ少しキツイ。

「これは冗談でもなんでもないんだ。少なくとも僕の中ではバーンは尊敬できるキャラだ」

「オレも同じだな。実際姉さん達も会ってみれば付いても良いと考えますよ」

「そんなに評価できるの？」

「少なくとも正義の魔法使いよりは信用も信頼も出来るね」

「いいわ、会いに行きましょう」

「よろしいので、姉上」

「ええ、刹那も興味あるでしょう」

「それは確かにそうですが」

「別に配下に付くとまでは言っていないわ。とりあえず会ってそれから決めましょう。それでそのバーンはどこにいるの？」

「……そういえば魔界ってどこにあるんだ？」

「……それは本気で言ってるの」

side out

side フェイト

確か地上を吹き飛ばせば魔界に太陽の光を与える事が出来るとか言っていた様な気がするという零樹の言葉で現在僕達二人は穴を掘っている。その間にリーネは魔法を刹那は闘気法を取得できる方法を探してもらっている。

「おい、フェイト。これってオリハルコンじゃねえか？」

「くっ、また（・・・）稀少金属の鉱脈にぶつかったのかい」

「くそ、今までとは段違いに硬い。これは苦勞するぞ」

穴を掘り始めて早3日が過ぎているが全然掘り進めていない。理由は稀少金属の鉱脈に何度もぶつかっているからだ。正直これが銀や、

金なら無視しているところだがミスリルやエビルメタル、なぜあるのか分からない鍊金鋼の原石、果てにはオリハルコンの鉱脈を見逃す事は出来ない。

「仕方ないけど出来るだけ回収しておこう」

「面倒だな、隔離結界とグレンラガンで一気に片を付けないか？」

「それも良いかもしれないね」

というわけで即座に結界を敷き、倉庫からグレンラガンを出して掘ってみたのだが、その後も出るわ出るわ稀少金属が。それもドラクエの世界で手に入るはずの無い物が。特にマテリアを見つけた時は一番驚いたね。

まあ、そんな感じで途中から脱線して鉱脈探しをしていたせいで戻って来たリーネ達に実験台と称した折檻を喰らう羽目になってしまった。

「それじゃあとつとと魔界まで穴をあけなさい」

「「イエスマム」」

リーネの命令とともに気合いを入れる。
グレンラガンのエネルギーは螺旋力。だがそれがどんな物か分から

なかった彼は代わりに気合いで動く様にこれを作った。どうやって作ったのかはさっぱりだが、本当に気合いで原作の様に合体、再生、強化がされる。だから全力で気合いを入れてドリルを廻し続ける。

「行くぞ、フエイト」

「ああ」

「「ギガ」」

グレンラガンの右腕に小さなドリルが生える。

「「ドリル」」

小さなドリルが腕先に集まり一つのドリルを形成し、一気に機体よりも大きなドリルに変わる。その状態から飛び上がりドリルの先端を地面に向ける。

「「ブレイクウウウウウウウウ」」

ドリルが高速回転し、ブースターを全開にして一気に地面を掘り進む。途中、ヒビロカネらしき鉱石も見かけたが今は見なかったふりをする。さすがに命は惜しいからね。

そんな感じで30秒程経つと今までとは全く違う岩盤にぶつかった。

「ストップだ、零樹」

「どうした」

「どうやら今までとは違った岩盤だ。調べる必要がある」

「了解だ」

グレンから飛び降り岩盤を触ってみる。感触から普通の岩であるのは間違いないが、特殊な魔法をかけられているのか削った先から超高速で修復されていく。

「これは厄介だね」

「ああ、だが削れると分かっているなら姉さん達も乗せて一気に掘り進めれば良いだけだ」

「それしか無いみたいだね」

一旦地上に上がり事情を説明してリーネと刹那にもグレンラガンに搭乗して貰い、気合いを入れる。どこに乗っているかって？気合いで復座型に変形しているんだよ。

…… 本当にどうやって作ったんだろう。

それはともかく4人乗りになったおかげで出力の上がったグレンラガンのドリルは岩盤を破り、大きな空間に落ちた。

「へえ、ここが魔界。以外にも光源があるしそれほどジメジメもしていないわね」

「代わりに空气中に大量の魔力が検出された。これが魔界の魔物が強い理由といったところか」

自由落下しながらも色々と情報を集めていく。ふむ、あの山の中腹にあるのは城かな。一応リストアップしておこう。他に目立つ建造物は、地平線ぎりぎりに見える街と、反対側にある海と思われる場

所にある漁村かな？それと城が建っている山の麓に村があるね。

「とりあえずこのまま着地したらグレンラガンをしまいなさい」

「了解。その後はどうする」

「向こうの山に城らしき物が見えた。とりあえずはそっちに向かってみないかい」

「賛成ですね。目的が魔王なら城などを襲っていれば嫌でも会えるでしょう」

「決まりね」

s i d e o u t

s i d e バーン

「バーン様、緊急事態です」

「どうしたのじゃミストよ」

「人間が襲撃をかけてきました」

「何？人間がじゃと」

「はい、それも僅か4名で」

「ふむ、ヒュンケルを迎撃に当たらせる。様子を見る」

「その必要は無いわよ」

「何！？もつここまで来たというのか」

ミストから報告があつた通り一人の女が部屋の入り口に立っていた。

「まったく無駄に広いわね、ここ」

「貴様、どうやってここまで」

「クロコダインとか言うのと、ヒュンケルとか言うのと、フレイザードとか言うのは私の妹が相手をしていて、ザボエラとか言うのとハドラーとか言うのは友人が、 balan とか言うのは弟が相手をしているわ。私は一直線にここまで走り抜けただけ、案内ご苦労様」

「ならば私が相手だ」

「よい、ミスト下がれ」

「しかし」

「下がれと言っておるのだ」

「……はっ」

「それで、僅か4人でここに何の用じゃ」

「まあ、それを話すとかなり長い事になるから簡単に説明させてもらっわ」

そう言うとなは影の中からテーブルと椅子を取り出し、茶を飲みながら自分たちの事を語った。

「つまりはこの世界の可能性の一つを知っている？」

「そうよ、理解が早くて助かるわ」

なるほど、これはある意味で厄介だ。可能性の一つを変えようと躍起になってしまえば思わぬアクシデントも起こりえよう。どうするべきか。

「とりあえず、主達はこれからどうするのだ」

「そうねえ、私達の意見とあなたが懸念している事も取り入れると私達は好き勝手に魔王軍が有利になる様に動く。そんなところが妥当かしら」

「そんなに良いんじゃないか」

「あら零樹、もう終わったの。ぼろぼろみただけど」

入り口から少しぼろぼろの男が入って来た。

「さすが今代の竜の騎士バラン。中々歯ごたえがあつたよ」

「刹那達は」

「もう倒し終わってこっちに向かってるよ。もちろん全員殺してはないよ」

「ほう、バランを倒すか」

「あんたが大魔王バーンか、まあオレもバランの竜魔人に似た様な能力があるからな。負ける事はないと思っていたが、さすがにドルオーラの直撃を喰らったときは死ぬかと思ったな」

ドルオーラの直撃を受けてもその程度の傷か。敵対だけはしたくないのう。

「話の方はついたかい」

「姉上、こちらはほぼ終わりました」

今度は白髪の男と女が部屋に入ってくる。男の方は服に汚れが目立つ程度、女に至っては軍団長との戦闘後とは思えん状態だった。

「とりあえずこれが私達のパーティーよ。強さは軍団長を殺さずに倒せるだけの实力はあるわ」

「そうじゃな、リーダーはお主か」

「一応はね」

「ならば主達を魔王軍遊撃師団とする。そして、お主を遊撃師団軍団長とする」

「構わないわ。なら改めて自己紹介といきましょうか。私はリーネ・M・テンリュウ」

「私は刹那・M・テンリュウ」

「オレは零樹・M・テンリュウ」

「最後に僕はフェイト・アーウェルンクス。この子達の最低限のお守りも担当している」

「我が名はバーン。大魔王バーンだ。お主達は我に対して忠誠は要らん。ただお主達が描く理想が我が描く理想と似ている事を願っております」

s i d e o u t

強化、確認、行動開始

side 零樹

大魔王軍に入ってから早くも半年が過ぎ去った。この半年で他の軍団長達とも友好関係を気付けたと思う。特にヒュンケルとは一番仲が良い。ああやって一つの事しか考えずに生きている者程オレに取っては眩しい存在だからこそいざというときの切り札を渡し、色々な技術すら与えた。これで原作の様にダイ達の仲間になればバランとすら戦えるかもしれない。そのバランにも息子が今も生きているという事を軽く教えてある。その事をもっと詳しく教えろと問いつめられたが生きているという事しか分からないと良い、もし見つかったら連絡するとも約束した。まあ原作と同じ場所に連れて行くだけだな。他にもハドラーとも仲が良い。原作序盤のハドラーは私欲にまみれて残念なキャラだがオレたちという人間の力の凄さを見せつけた結果、原作終盤の様な漢気溢れ、どっしりと構えられる魔軍司令となった。

だが、少し予定外の事が判明した。まずはバランの息子は双子だということ、更にハドラーが破れた際アバン以外にもう一人アバン並みかそれ以上の力を持つ女賢者レインがいたという。

めんどくさいがそいつらが誰なのかはすぐに分かった。オレたちの世界にも居た他の世界から神々によって送られて来た者。つまり転生者が居るという事だ。

過去に相手をした事があるがどんな能力を持っているか分からない以上保険を色々用意しておく必要があると考えられる。

そのために装備の開発から行なった。結果だけ言っとオリハルコンの装備がオレたちの力に耐え切れずに壊れた、加工の最終段階で。

返せよオレの睡眠時間。諦めて父さんが作った武器を使用する事が決定した。

さらに少しでも地上の戦力を削る為に鬼岩城をブラザーズとシスターズを投入した上で強化魔改造中だ。魔界に来る際に見つけた鉱石を使い強度を上げたり魔力砲を取り付けたり生産工場を増設したりバリアを張れる様にしたたり、ぶっちゃけ何処かの移民船団の旗艦みたいな事になっている。もちろん外見に変化はほとんど無い。少し色が変わった位だ。これはバーンが自分の完全体を想像して作ったものだから外見は出来るだけ変えない様にと言われているからだ。

さらに二ヶ月の時が過ぎた。今日から大々的に侵攻を開始するためバーンパレスから軍団長が殆ど居なくなった。残っているのはバーン、ミスト、キル、それからハドラーとオレたちだけだ。サーチャーをデルムリン島に飛ばしているのでアバンと件の女賢者レインが到着するのも確認したし、ダイの隣に兄を名乗る男の子も確認した。そして外見からすぐに転生者だと分かった。なぜなら女賢者の方はコードギアスのC・Cの姿を、ダイの兄は5D'sの遊星を子供にした様な姿をしているからだ。感じれる力はそれほど高くない。高くないと言っても賢者としては最高峰だし、子供にしては極端に高い。情報通りアバンやダイ以上の力は持っているのだろう。中身はどうか知らんが。とりあえず姉さん達に報告してから眠りについた。

久しぶりに夢を見た。

視界を覆い尽くす程の鎖が存在する夢を見た。そしてその鎖に覆われている何かを見たところで夢から覚めた。
この夢は一体なんだったんだ？

s i d e o u t

s i d e リーネ

「何かが大量の鎖に覆われている夢？」

「ああ、しかも明晰夢だった。だが心当たりがさっぱり無いんだ」

「それを見たのは何時？」

「今朝だ。今までも明晰夢を見る事はあってもそれはいつも悪夢だった。が今回は全く違う意味が分からない物だったんだ。だから外部から何か干渉があったと思うんだ」

「その説明を手伝って欲しいと」

「そうなんだ」

「構わないわよ。私もその夢が気になるから。とりあえずは夢に――

緒に潜れば良いかしら」

「それをお願い。眠りの霧で無理矢理寝てから夢渡りをするから、寝てから5分程経ってから潜って来て」

「分かったわ」

話が終わるとその場で零樹は眠りの霧で椅子に座ったまま眠りについていた。慣れているのね。それも仕方ないわね。二度も愛する者を守れずに壊れてしまったんだから。その頃に無理矢理寝る為に眠りの霧を使っていたんでしょね。三度目は大丈夫だったからこそ、ここまで立ち直ったのでしょけど、その為に自分を捨ててお父様の様に振る舞って本当にそれで良いの、零樹。

…… 見ているだけしか出来ないなんて、情けない。私ではどうする事も出来ない。不甲斐ない姉を許して頂戴。

「そろそろ5分ね」

零樹の隣に椅子を持って行き零樹の夢に潜る。

そこは確かに鎖で覆われた何かがある空間だった。零樹も居るけどこの明晰夢を維持する事に集中しているみたいだからそつとしておき出来る限りの情報を集める。

まずは鎖、何らかの力が込められている見ただけでよく分からないわね。

次に空間を見渡してみる。そんなに広くはなく鎖に覆われている何かを中心に1kmといったところかしら。特に変なところは一切ないわね。

最後に中心にある何か。近づいて触ろうと

- - - コナイデ - - -

次の瞬間、鎖の魔力に弾かれる様に夢から追い出された。
今のはまさか!?

「姉さん、何か分かったかい」

こちらに戻されると同時に零樹が目を覚ます。

「あまり分かっていないは。分かった事は二つ。あの中心にあるのは、いえあの中心には誰かが居るという事と、鎖がそれを守っているという事よ。おまけに私は嫌われたみたいだからもうあの夢に入る事は出来ないわね」

「誰か？オレたちに干渉できるという事は……………神」

「いえ、違うでしょうね。あそこに居る誰かがあなたに害を及ぼすとはあまり考えられないわ」

「なぜそう思うんだ」

「強いていうなら女の勘ね」

嘘だ。本当はアレが誰なのか見当がついているからこそ断言できるだけだ。だけど何故今になってなの？どうしてもっと早く現れなかったの。伝えるべきじゃない。今の状態の零樹が知ればまた壊れる。いえ、今度こそ完全に狂う。そんな事は絶対にさせない。でも、それでも零樹が昔みたいに笑える様になるにはあの子の正体を知る必要がある。

「分かった。今はそれで納得しておくよ」

チャンスは一度だけ。失敗すれば絶対に問いつめてくるのは分かっている。絶対に失敗するわけにはいかない。気付かれない様に魔力を瞳に集める。いつかは真実を知る必要があるでしょうけど、それは今ではない。これからするのはただの時間稼ぎ。この時間の間に誰かが零樹の心を癒せなければ私は零樹をこの手で葬る。それが良いのか悪いのかは分からないけど姉として、そして私自身あんな零樹を見ていられない。それならいつそ楽にしてあげた方が良く私は考える。

「零樹」

部屋を出て行こうとする零樹に声をかけ振り向いた所に魔眼で強力な暗示をかける。

『明晰夢を疑問に思わず、詳しく探ろうと思わない』

そういう暗示、というよりもギアスに近い。これに言霊を乗せればギアスになるといった方が正しい。

「どうしたんだい」

「ハドラーが二日後にアバンと決着をつけに行くのは聞いているわ

ね」

「ああ、それに付いて行く予定だが」

「転生者の処遇だけどあなたに任せるわ。最悪、バランの息子の方も殺して構わないわ」

「判断基準はどうする」

「ハーレムとかを考えているなら即処分。力に溺れている様な感じでも処分。それ以外なら今回は保留。後々に全員で話し合ってからどうするかを決定するわ。処分方法は任せるわ。ただし原作のキャラに力を使っている所を見せない様にしなさい」

「了解。任されたよ」

そう言つて部屋から出て行く零樹を見送る。どうやらバレずにすんだようだ。これで幾らかの時間が稼げる。その間に零樹の心の傷を癒せる者が、自分で完全に立ち直れる事を祈るしか無いわね。

s i d e o u t

確認、決闘、リンチ

side レイン

こちらの世界に転生してから早●6年。前世の知識と努力と根性とガッツで賢者となり、勇者一向に加わり、魔王ハドラーとの最終決戦にはアバンに最後まで着いて行き余力を残して勝利する事が出来た。その旅で私はアバンに恋をした。原作ではカール王国の女王と結婚して王になっていたけど、そんなのは知りません。絶対に私の物にしてみせます。だからハドラーを倒す旅が終わった後もずっとアバンに付いて行っただ。旅の途中、原作の主人公の相棒であるポツプ君が弟子に加わり原作よりも力を付けてもらおうと色々和小技を教えたりした。デルムリン島に到着すると予想外の事が起こった。主人公のダイに兄が居たという事だ。それが誰かはすぐに分かった。私と同じ転生者だ。しかも神にチートまで与えられているそう。そのチートは竜の紋章を額と両手に1つずつの計3個を貰ったそうです。かなり羨ましいです。こっちは産まれて2歳後半から修行を開始して何回も死にかけたというのに。3回程死んでザオラルで蘇りました。もう死にたくはないですね。まあ目的はそしてとうとうこの日がやって来た。原作でアバンがメガンテを使う日。まあ、今まで通り二人で戦えば問題なんて無いし、ダン（ダイの兄の名前）も手伝ってくれるそうなので、ここでハドラーを倒しきろうと思います。

「久しいな勇者アバン、そして大賢者レインよ」

「やはり復活していたか、魔王ハドラー」

ついにハドラーが目の前に現れたが何処か違和感が。それに後ろに控えている人間は一体何者？

「魔王、か。それは以前までの話よ」

「何っ!？」

「貴様に破れ死の世界を漂っていたオレを蘇生させて下さった偉大なる魔界の神、それが今の魔王、いや大魔王様だ。オレはその大魔王様の全軍を束ねる総司令、魔軍司令ハドラーだ」

おかしい？ここではバーンの名を宣言したはず。それに高笑いする訳でもなく淡々と事実を述べるだけ。まるで超魔生物になってからの様な威厳がある。

「アバン、それにレインよ。そこに居る三人は貴様らの弟子か？悪い事は言わん、とつとと逃がせ」

「それを言うなら貴様の後ろに居る……人間なのか」

「ふっ、オレは魔王軍遊撃師団所属のレイキだ。ハドラーがアバンと一騎打ちがしたいというのでな、オレが他の奴らの相手をする。死ぬ覚悟があるのなら武器を取れ。無いのなら背中を向けて逃げされ。後ろから打つ様なマネはしない」

くっ、なんて殺気。こいつ、まさかハドラー以上に強い。

「レイン、ポップ達を連れて逃げて下さい」

「アバン、でも」

「気付いているのでしょうか。彼らは強い。それこそ私に万が一が、いえ、おそらく私はハドラーに勝てないでしょう」

「そ、そんな先生」

「……行くわよ皆」

「弟子を頼みます、レイン」

「死なないで、アバン」

ダンは何も言わずに従ってくれ私はポップとダイを気絶させてその場から逃げ出した。

s i d e o u t

s i d e 零樹

逃げるか、おそらくオレの存在が撤退に導いているのだろう。そしてサーチャーに気付いている様子も無いか。それだけが分かれば十分か。

「さて、両者とも戦いを始める前に形見を残すか。武人として約束
違えずに届けるが、どうする」

「オレは残さん。が、もしものときは大魔王様に謝罪を伝えて欲し
い」

「必ず伝えよう。アバンはどうする」

「……信用しても」

「男の最後の約束を破る様なマネはせん。戦争ならともかくこれは
決闘だ。それを穢す様なマネもせん」

「信用します。これを三人の弟子に、そしてこちらをレインにお願
いします」

その言葉と共にオレはアバンのしるしを3つと指輪を預かる。

「必ず届けよう。これで両者ともに思い残した事は無いな」

「ああ」「はい」

「ならば両者、構え……」

ハドラーはフードを脱ぎ捨て、アバンは居合い切りの構えをとる。

「始め」

合図と同時にハドラーが限界まで収束させたギラを連発する。この
行動が予想外だったアバンは転がって躲す。今度はイオが足場や天

井で爆発し、その破片がアバンに傷を与えていく。アバンも負けじとベギラマを放つもハドラーは簡単に躲す。

「こんなものなのかアバンよ。昔のお前の方が強く感じるぞ」

「実際にそうなのかも知れません。お前が倒れてから地上は平和になりました。それでも私とレインはお前が生きている様に感じそれを各国の王達に伝えましたが相手にもされず、いつ私の前に姿を現すのかが分からなかった。その時に私が戦えるかどうか。だからこそ勇者の家庭教師をし次世代の育成に励んで来た。その結果がこれなのでしょ」

「つまらん、つまらんぞアバンよ。オレは大魔王様に蘇生させていただき自由に活動できる様になってからも自分の研鑽を欠かした事は無い。だが、そんなオレもある人間に負け、人間の素晴らしさを理解する事が出来た。だからこそアバン、オレはお前と戦う事を楽しみにしていた。なのにこの様はなんだ」

「申し訳ありませんねハドラー。だが私にも勇者としての意地がある。それをお見せしますよ」

アバンが剣を逆手に構える。

「アバンストラッシュか。良かろう、貴様の勇者としての意地、真っ向から受けてやる」

ハドラーの両手に魔力が集まり両手を突き出す。おそらくイオナズンを放つのだろう。

「感謝しますハドラー」

「御託は良い、掛かって来い。イオナズン」

「はああああああ」

決死ともいえるアバンストラッシュはイオナズンを切り裂き、確かにハドラーを斬る事には成功した。が、傷は浅く、剣も折れ、ハドラーの逆撃を喰らう。

「でえやああああ」

だが、それも策の一つだったのか両手の指をハドラーの頭に突き刺し固定し魔力を集中させる。

「アバン、貴様、まさか」

「ええ、貴方が考えている様にあの呪文を使います」

「やはりか、死を覚悟しているのだな」

「元よりこれしかないと考えていました。これなら今の貴方でも倒せると」

「そうか、ならオレはそれに耐えてみせよう」

ハドラーが攻撃をやめ魔力で身体を強化していく。

「一緒にあの世に来てもらいますよ」

「断る」

「メガンテ」

次の瞬間、大爆発が起こる。自分の生命力を爆発させる自爆呪文、それがメガンテ。その威力は極大呪文並みの威力を持っている。それを至近距離で受けたハドラーもただではすまないだろう。最もそれでハドラーが死ぬ等露にも思わないが。

予想通り爆発が治まり少し経つとハドラーが瓦礫の下から這い上がって来た。

「……アバンはどうなった」

「僧侶以外がメガンテを使っただ。言わずとも分かっているだろう」

「……そうか」

「それより傷の方は大丈夫か」

「問題ないと言いたいがここは退かせてもらっ。後の事は頼んだ」

「了解だ」

そう言うハドラーはカメラの翼を取り出し鬼岩城へと引き上げていった。それを見送ってから海を眺める。そしてそこに浮かぶ一人の男を確認する。

「安らかに眠れアバンよ」

影から弓を取り出し心臓を射抜く。そして沈んでいく姿を確認して

から約束通りアバンの形見を届けにいく事にする。そう、死んでいなければ形見になりえないのだから。

普通に残されている足跡をたどりオレはアバンの弟子と転生者が居る場所まで簡単に辿り着いた。オレの姿を見るとポップとプラス以外が武器を構えるがそれを無視して

「アバンの形見を届けに来た」

とだけ告げ形見を投げ渡す。

ダイとポップとダイの兄にするしをレインと呼ばれる賢者に指輪を。

「嘘だ。先生が死ぬはず無い」

ダイがパプニカのナイフで切り掛かってくるがそれを避けずに肉体強化で受ける。筋は良いがやはりまだまだレベルが低いのかオレにダメージを負わせる程ではない。

「ダイ、下がれ」

ダイが下がると同時にメラゾーマが3つ飛んで来たので闇の魔法を応用して投げ返す。まさか投げ返されると思っていなかったのかポップだけ回避が遅れるがダイの海波斬で事なきを得る。

「そんなにアバンの後を追いたいのなら追わせてやるぞ」

「そんな事は私がさせない」

レインがダイ達を庇う様に前に出る。

さて、どうするべきか。そうだな、動揺を誘うか。

「ほう、アバンの様にメガンテを使ってでも弟子を守るつもりか」

この言葉にダイとポップは動揺するが、レインとダイの兄は真直ぐにこちらを見ている。つまり原作を知っているという事か。ならこれを見れば十分か。投影を使い形だけを真似たカールの守りを見せる。

「これが何か分かるか」

それを見てレイン達は一気に動揺した。

「これはアバンの最後の形見、オレはこの後カールの女王フローラに届けなければならない。時間が無いから来るなら来い」

「きつ、貴様」

ダイの兄が竜の紋章を両手と額に表し飛びかかってくる。正直に言おう。がっかりだ。弱すぎる。使いこなせていない以上にもとが弱すぎる。これでは宝の持ち腐れだ。

「殺しはしないでおいでやる。ありがたく思え」

刹那姉さんがそこら辺で買って来た銅の剣でダイの兄の両腕を切り落とす。バランスと約束している以上殺すのは問題があると判断したからこそだ。竜鬨気を纏っていたみたいだがバランスと比べると薄いとしか言いようも無く簡単に切り落とす事が出来た。そして素早く回し蹴りを喰らわし吹き飛ばす。

「これだけの實力差でまだやるか、大賢者レインよ」

レインがメドローアを構えてこちらの隙をうかがっていた。

「それでもまだやるというのなら命の覚悟をしろ」

「貴様だけは絶対に許さない」

「それが返答か。ならば撃つが良い。もっとも抵抗はさせてもらうがな」

オレは両腕をクロスさせて構える。

「死になさい。メドローア」

「……グランドクルス」

劇中最強の魔法メドローア、相反する二つのエネルギーを合成する事で対象を対消滅させる魔法。確かに劇中なら最強だったのだろう。だが、グランドクルスは己の闘気を全力で放射する技。闘気とは生命力や気ではないかとオレたちは考えている。そこで試しに咸卦法を使用しながら闘気技を使用した所威力が上がる事が判明した。つまり元の世界で咸卦法を使い続けていたオレたちがグランドクルスを使えばどうなるか。答えは竜闘気を放つドルオーラ以上の威力が出る。結果、魔力と気の罅迫り合いなど起こる事無くオレが放ったグランドクルスはメドローアとレインを、そしてその背後にあった森を飲み込み海を割った。完全にレインが死んだのを確認し振り返るとダイの兄の治療が終わり様子を見に来たプラスが杖を構えていた。

「ぜ、絶対にこれ以上ダン達には手を出させんぞ」

我が子を守らんとするその姿を見て昔を思い出す。

オレはあの子の良き父であれたであろうか。

何万回以上自問し、結局答えのなかった答えの一つを見せつけられた気分だ。

「ブラス老よ、お前はモンスターだ。だが、貴様の言うダン達は人間だ。貴様にとってあいつらは何だ」

「モンスターだ、人間だなんて関係ない。ワシにとってダン達は家族で、ワシの自慢の息子達じゃ」

オレもそんな風に言える関係で居たかったな。だが、それも過去の話か。気持ちの切り替える。

「そうか、なら一番に教えておくべきだったな。相手が格上かどうかの見極め方を。逃げる事は卑怯ではない。生きている限り敗北ではないんだから。今日はここで退かせてもらう。それと、島を傷つけてすまなかったな」

ルーラで鬼岩城に引き上げようとするとダイが飛び出して来た。

「オレはお前を絶対に許さない。絶対に強くなってお前を倒してやる」

「名は何という」

「ダイ、勇者ダイ」

「オレの名はレイキ・マクダウェル・テンリユウ。勇者ダイよ。貴様が強くなり再び相見える事を楽しみに待っていてやろう」

今度こそルーラで飛び去った。一応カールに赴きフローラに形見としてカールの守りを渡す為にメタルでソリッドな蛇の人みたかカール城に侵入。目標であるフローラにだけ姿を見せ形見を渡し逃走した。

さて、世界はどう動く事になるかな。

s i d e o u t

夢、弟子、告白

side 零樹

「オレはまた夢を見ているのか」

誰かが鎖で覆われた空間にオレは立っていた。

「なあ、オレを呼んで何がしたいんだ」

返事はない。それでも何かしなければならなかったと感じた。

「少し独り言に付き合ってもらっても良いか？」

何も無いと思ったら優しい風が吹いた。これは付き合ってもらえると考えれば良いのだろう。

「今日、プラスという奴にあっただが、そいつはモンスターなんだが人間の子供を育ててたんだ。それも本当の親子の様にそれが羨ましかった」

話しながら昔を思い出す。トラウマに近い記憶を。

「オレも昔、血の繋がらない子供を育てたことがあるんだ。その娘と出会ったのはある場所で戦争が起こったときだ。その戦争にオレも妻も家族全員で参加していた。オレの妻が敵の攻撃からある親子

を庇ったが庇い切れずに親子にも被害にあった。そして母親が命を落とす直前にオレに託した子だ。オレの妻は自分が庇った親子がどうなったか気にしていた、自分がもう死ぬのが分かっていたのに。オレは正直に話し、子供しか救えなかったと言った。そうしたら妻は『それだけではまだ救えていない。私はもう駄目だからその娘を私達の娘だと思つて育てて欲しい』と残して逝ってしまった」

そしてオレは暴走した。仇を文字通り塵一つ残さず消し飛ばした。

「オレはその戦争で色々なものを無くしすぎた。妻を両親を友を。そして約束という名の呪いを手にした。当時のオレは妻との約束の為だけに生きていただけに過ぎなかった。その娘には妻の事も本当の親の事も教えず育てた。そしてその娘を見るたびにあの日の事を思い出し、何故妻の代わりにこの娘が生きているのかと悩み続ける日々が続いた」

本当に何度殺そうかと思つた事が分からない。娘の命を使って反魂の術を使おうか悩んだ。

「そして12歳の誕生日に真実を告げた。その頃には一人で生きていけるだけの知識と力を与えていたからな。そしてオレの心の内側を全て吐き出した。そこから予想外だった。娘はずっと前からその真実に気付いていた。それでも自分の親はオレだと泣き付かれた。その日初めてオレは娘と本当の家族になれたんだと思う」

あの時は本当に嬉しかった。だけど

「だけど、それも長くは続かなかった。その翌年の事だ。毎年一人で行っていた妻の墓参りに二人で行ったときだ。妻を失った戦争で

ある一つの国が崩壊した。そこにはある称号があった。笑うかもしれないが『立派な魔法使い』という称号だ」

『立派な魔法使い』という言葉に世界が震える。
これは怒りか？

「あの日『立派な魔法使い』達がオレを殺す為に共同墓地、いや、街ごと一般人も巻き込んで魔法で吹き飛ばしやがった」

全てが赤と黒に染められた世界。あの光景は一生忘れる事が出来ないだろう。

「オレは不老不死の存在だからなんとか生き残れる事が出来た。だが娘は……二度も家族を守れなかったオレは復讐の道を進み、復讐が終わった後、心が摩耗し過ぎ廃人の様に過ごした」

そこまで話した所で何かがくだける音と同時に夢から覚めた。
目が覚めると外はまだ暗かった。

「遅い目覚めだね」

「フェイトか、オレは何日寝ていた」

「さあ？君が何時寝たのかが分からないからどうとも言えないね。
とりあえず今はクロコダインがやられてヒュンケル以外が集まっている所だよ」

「1週間近く寝てるな」

「何かの病気かい？」

「いや、病気ではないがこれからこんなことが起こる可能性がある
とだけ言っておく。それよりバランスがこっちにいるならダイ達の
ことを教えておいて欲しい」

「何故だい？君が直接伝えれば良いじゃないか」

「オレは少しやりたい事があるのでな」

「そうか伝えておこう。兄の方はデルムリン島で弟はダイだと伝え
ておけば良いのかい？」

「ついでに兄の方は両腕を吹き飛ばしちまったと伝えといてくれ」

「なっ！？」

「じゃあ後は任せた」

フェイトが何か言おうとしていたが無視して影に飛び込む。向かう
はパプニカ。一時的な弟子であるヒュンケルの様子を見る為に。

転移して戦闘音が聞こえる方に行くと丁度クロコダインが乱入する
場面に出くわした。ここでは原作通り鎧の魔剣を装備している。や
はりアレは使っていないか。その後のヒュンケルの行動は原作通り
だったのでスルー、ダイ達の方はラナリオンからの……ギガデイン
だと！？こんな所で補正が入ったか。違うな、何れオレと戦うとき
の為か。ライデインの練習もしているしな。ポップの疲労具合もそ
こまで酷くないみたいだからレインが鍛えていたんだろう。

さて、フレイザードを止める為に準備だけはしておくか。どうやって邪魔をしようか。

とか考えてたら原作通りの決着が付きフレイザードが現れない。あれ？

と拍子抜けしていると火山が噴火を始めた。

まさかオレがいる事に気付いていて姿を現さずに直接火口に向かいやがったな。おそらくこの予想で間違いないだろう。しかしどうしよう。とりあえずこのまま放置してみよう。

ヒュンケルがダイ達を投げ飛ばして溶岩に飲み込まれたか。いや、この感じは溶岩の中で変身したな。なら大丈夫だろう。おっと、クロコダインに見つかる所だったな。ヒュンケルが鎧の魔剣以外の姿でいる事に驚いているな。

それにしても渡すタイミングを逃したな。どうするかな、このラウズアブソーバーと3枚のカード。とりあえずKは保留としても今後、そう言えばフレイザードの時に全軍集まるのか？まずいな、追いかけてでも渡すべきだ。気付かれない様に地上を走りながらクロコダインを追っていくと洞窟らしき所に入っていくのを確認する。ここまで来ればバレても問題は無いので空を飛んで洞窟に入る。

「……レイキ、どうやってここを」

「弟子の戦いを見ていたからな。クロコダイン、ヒュンケル、お前達は人間側に回るんだな」

「……師匠、すまないと思う。だが、オレは」

「そうか、進むべき道が見つかったか。行けば良いさ、今日だけは見逃してやる。餞別だ」

ラウズアブソーバーをヒュンケルに投げ渡す。

「これは」

「ラウズアブソーバー、剣の新たな可能性を引き出す物だ。中にJ、Qのカードが入っている。それをQ、Jの順にラウズすれば良い。次に会う事があればオレは容赦なくお前らを切り捨てる。覚悟しておけ」

「……短い間でしたがお世話になりました」

「じゃあな、出来れば出会わない事を祈ってるがそれも無理だろうな。だからオレからは生きるとだけ言わせてもらおうよ。クロコダイも元気だな」

それだけを伝えてルーラで鬼岩城に戻る。これでなんとかどっこいどっこいになるだろうと考えているとバランに捕まりました。それはもうすごい殺気を放ちながら今にも竜魔人化しそうなバランを見て抵抗せずに捕まりましたよ。だってバランクラスになると殺さずに倒すのって面倒なんだもん。

「それで、一体何のようですかバラン殿」

「息子が貴様に頼みたい事があるという」

「どっちの?」

「貴様に腕を切り落とされた方のだ」

斬り掛かって来たから斬り返したただけなのにオレが悪いみたいと言われる。理不尽だ。

「いやあ、予想以上に弱くてな。まさか銅の剣で切り落とせるなんて思っても見なかったんだよ」

「何!？」

「詳細を省くが明らかにダイ、ディーノよりも強かった。竜鬪気すら纏っていたからな。だから怪我等しないだろうと思ったたらあつさり斬れたんだからしょうがないだろうが」

「とりあえず話を聞いてやって欲しい」

「分かったよ。叶えられる物なら叶えてやれば良いのか」

「そうしてもらえると助かる」

バルンに案内されある一室に入る。そこには両腕を失った少年が窓際の椅子から外を見ていた。

「はーい、お久しぶり。元気にしてるかーい」

「……ああ、来てくれましたか」

今にも自殺しそうで結構怖い。昔のオレを見ているみたいだ。

「それでオレに頼みって何だ? 場合によっては叶えてやろう」

「その前に確認です。貴方は僕と同じなんですか」

「違う。オレたちは自分の意志でここにいる」

傍にバルンがいる事から出来るだけ単語を出さずに会話をする。

「ディケイドの様なものと判断しても」

「どっちかというと鳴滝の方だ。それと元はネギマ！から来ている。オレたちの父親がネギマ！に辿り着いた事で大きく歴史が変わったが、基本は一緒だったはず。それで君は何を望む」

「貴方達の目的はなんだ」

「修正力の調査だ。あとはお遊びだな」

「遊びだと」

「そうだ、オレたちにとってこの度の戦争は遊びだ。先に言っておいてやる。オレたちは真の大魔王が相手でも瞬殺出来るだけの力がある」

「！！」

「レイキよ、先程から何を話しているのだ。それに真の大魔王とは何の事だ」

「ふむ、簡単に説明するとバルン殿の息子はオレたちの世界の記憶を所持しているという事です」

「レイキ達の世界の記憶という事は、この先の未来の事を言ってお

るのか」

「ええ、その上でこの子はオレに頼み事があると言いオレと会いたかったでしょう。それで何を頼む」

「……もし、最後の様な事になった時にダイを助けてやって欲しい」

「ふむ、それ位なら良いだろう。では balan 殿、オレはこれで失礼させてもらつ」

「待ってくれ、出来ればこの子の腕を治してもらいたい」

「もし、腕を治して襲つて来た時に balan 殿は討てますか」

「……」

「覚悟があるというのならフェイトに言つて下さい」

「……分かつた」

「では、これで」

部屋を後にしてとりあえず食堂へ向かう。よくよく考えると1週間以上何も食べていない計算になる。別に1ヶ月位なら飲み食い無しで戦う事も出来るが胃液が胃を溶かしている感じがするので何か腹に込めなければならぬと思ひ早速飯を食う。

ちなみに鬼岩城の食堂は年中無休24時間営業で幹部クラスになると飯がタダで喰える。もちろん遊撃師団員は全員が幹部クラスだ。とりあえずパンを文字通り山盛り、シチュー寸胴鍋ごと貰い黙々と食べ続ける。意外な事に人型の魔物の食生活は人間とあまり変わら

ないのか味も中々の物だ……材料はあまり聞きたくないがな。

「零樹、ここにいましたか」

「うん？刹那姉さん、何か用」

「いえ、ハドラーがバルジ島にて師団長全員でダイ達を倒すと言っているのですがどうしますか」

「リーネ姉さんはなんて言ってる」

「この世界での方針は全て任せると」

「じゃあ、今回は保留で。もう少しこの世界で色々な事をしてみたいからね。主に鉱石とか薬草の採取」

「はあ、分かりました」

「ごめんだけどよろしく。たぶんハドラー達は負けるだろうから」

「零樹はどうするんですか」

「オレはこの世界の呪文の昇華をしようと思う。中々興味深いからね。こんな気持ちは久しぶりだよ」

「……」

「……夢を見て昔を思い出した。あの頃のオレはこんな風に実験やら研究やらをしているのが一番、という訳ではないけど好きだった」

「あの頃は皆が幸せでしたね」

「いや、一人だけ違う。あいつだけは違ったせいで今のオレ達がいる」

「……分かっていると思いますが、いずれ私達の出身世界に似た世界に行く事もあるかもしれません。その時は」

「分かっている。そこにいるあいつはあいつではない。だから私情を挟むなど言いたいんだろう。そんなことはこの旅に出るという話が出たときからずっと考えていたさ。だけど別人だと分かっているオレは自分を止める事は出来ない。いや、止めてはならないんだ」

「……そうですか」

「ごめん、でもこれだけは譲れない」

「いえ、仕方ない事なのでしょう。では私は姉上に報告に行つて来ます」

姉さんが食堂を去った後、食事を再開するも先程とは違ううまいと感じなかった。

s i d e o u t

予想外、別れ、ヒーロー

side 零樹

「全滅した!？」

「ああ、勇者ダイのパーティーはダイ、ヒュンケルを除いて死亡を確認した。ダイも記憶を消されディーノとして生きていくだろう。ヒュンケルも瀕死の重症だ。最もこちらもバランとミスト以外は全員が死亡した。そのバランとミストも重傷を負っている。ハドラーは現在蘇生中だ」

「……終わつたな。もうこの世界でやる事は採取位だな。それが終わったら他の世界に行こう」

「バーンとはやり合わないのかい」

「あの程度今更だろうが。倒そうと思えばいつでも倒せる。そんな事をするなら他の世界で遊んだ方がマシだ」

「確かにそうだね」

「あつ、でもカイザーフェニックス、カラミティエンド、フェニックスウィング、ついでに天地魔闘は見ておきたいな」

「そこらはバーンと話し合って模擬戦か何かをするしか無いね」

まあ、予想外な事が起きてしまい修正力の弱さを実感したオレたちは一年程採取、採掘を行ない続けた。そのお陰でかなりの量の鉱石や薬草を手に入れた。これならどんな世界に行こうとも問題等ないだろう。現在、世界はバーンの統治の元で平和になっている。勇者ダイは記憶を失ったままデイーノとして生きている。転生者ダンは原作メンバーがほとんど死んだ事を知り、人類を救う事を諦め魔王軍に参入しデイーノとバランと仲良く暮らしている。また腕は魔王軍に参入した時に復元している。ハドラーは天界に攻め入るその時の為に己を鍛え続けている。キルバーン、ピロロは既に死亡しているので問題は無い。ミストはヒュンケルに取り憑き肉体をバーンに返している。まあ、ヒュンケルが最後の足掻きにミストと魂で融合してしまったので正確等が微妙に変化してしまった。まあ、誤差の範囲らしい。そして、大魔王バーンは今

「くっ、まさかこれほどとは」

オレの目の前で倒れ伏している。

「こんな物が。まあ少しは強くなれたか」

今日はこの世界から旅立つ日だ。だからこそ今までの褒美として本気の模擬戦を行なってもらった。そして結果はオレの勝ち。当然の結果だ。この世界での最高速はルーラだ。そのルーラは瞬動よりも遙かに遅い。もちろん、超距離になれば最終的にはルーラの方が早くはなる。それはさておき、瞬動の速度での戦闘が基本となってい

るオレたちにその速度に付いて来れないバーンが敵うはずも無く、あっさりと勝ててしまった。当然、カイザーフェニックス、カラミティエンド、フェニックスウィング、ついでに天地魔闘を喰らっては見たがあまり大したことは無かった。

「さて、これでオレ達はこの世界でやる事は終わった。2年程だったが中々楽しむ事が出来た」

「……行くのか」

「ああ、オレたちの望みを叶える為にな」

「そうか、あれを持って」

「はっ」

倒れていたバーンがハドラーに何かを取りにいかせる。少し待つとハドラーが一本の瓶を持って来た。

「餞別だ。余が特別な時に開けようと思っていたワインだ」

「ほう、いいのか」

「かまわん。まだもう一本残っている」

「なら遠慮なく受け取らせてもらおう」

ハドラーからワインを受け取りそれを影に放り込む。

「さて、それでは行かせて貰おう。大魔王バーンに神殺しの息子の

祝福を」

姉さんたちが待っているこの世界の霊地に向かい、霊地の魔力を使い世界を渡る。視界が白に染まり、やがてビル的一角に出る。

「どうやら幾らか科学が発展している世界のようなね」

「文化レベルで言うなら西暦2000年初頭から中期辺りだろうね」

「文字はどうやら英語のようですね。普通に読めますし」

「アメリカっぽい気がするのは気のせいではないな。どんなことがうん？」

『本日未明から連続殺人犯、エディ・マクガイソンが職務質問をした警察官を殺害。現在、パトカーを奪い市街を暴走中。未だヒーロの姿は確認できません。ちなみにこの番組は皆さんご存知の通り、超能力を持つヒーローが犯罪や災害等、実際の事件現場で活躍する模様を生放送でお茶の間にお届け。活躍の場に見合ったポイントを加算し、キング・オブ・ヒーローを決めようというエンターテインメントレスキュー番組、HERO TV LIVE』

あゝ、なんだこれ？

「TIGER & BUNNYの世界か。なるほど、ほとんど収穫がなさそうな世界だね」

「フェイトは知っているのか」

「ああ、放送時期には君は子育てで忙しかった頃だから見ていなく

ても不思議ではない。どんなアニメだったかと言われるとあそこで放送されているヒーローたちが主役のアニメだね。ヒーロー達の色々と隠された悩み等にスポットが当てられたものだったよ。中々おもしろいとは思ったよ。調や？達も気に入っていたからね。ただこの世界の超能力は遺伝で決まるみたいだから手に入れるのは不可能だと思うよ」

ヒーローか。何とも童心をくすぐってくれるというか。なんというか。

「おもしろそうね。零樹、あなたもそうは思わない」

「当たり前だね。だからこそやる事は一つだと思うよ」

こんな世界に合うとっておきの物がちょうどあるしね。

「なら行きなさい」

「姉さん達はどうするの？」

「今回もサポートに回ってあげる。お父様らしく振る舞いなさい」

父さんらしく、か。ならこれしか無いな。服装を白いスーツとソフト帽に変え、黒いバイクを取り出し、腰にベルトを巻き付ける。明らかに左右対称だったバックルの左半分を取り払った様なベルトだが父さんらしくするならこれしか無い。骸骨をモチーフにした「S」が描かれているUSBメモリの様な物を右手に持ち、スイッチを押す。

>>SKULL!<<

「変身」

メモリをバックルに装着し開く。

>>SKULL!<<

銀と黒を基調としたボディに骸骨に似た仮面と白色のボロボロのマフラ―。額にある「S」の傷を隠す様に左手に持っている帽子を被り隠す。バイクに跨がり、アクセルを全開にして犯人がいると思われる場所に向かう。

side out

side other

『ヒーロー達はまだ姿を見せてくれません。さあ、誰が一番最初に、なつ、なんだ。』犯人の乗ったパトカーに突如銃撃が行なわれたぞ。パトカーはそのまま壁にぶつかり大破。しかし犯人はすぐに逃走を再開したぞ。そこにまたしても銃撃。一体誰が』

画面には覆面をし、手に銃を持った男が慌てふためいている。それも当然だ。自分を追ってくるはずのヒーローはこんな武器を使っただけは来ない。それに逮捕しようとする為に殺される様な事もされない。だが、今の攻撃は明らかに人を殺せる様なものだからだ。

『なっ、何だあれは』

司会が驚愕の声を上げている。カメラがある物に焦点を合わせる。あり得ないものを見た。それはビルからビルに跳躍しながら犯人のいる方に向かっているバイクだった。しかも跳躍中に手に持った銃の様なもので犯人の足止めをしている。そして、とうとう犯人の目の前に降り立つ。司会とカメラを乗せたヘリがそこに近づいていくとバイクに乗った白い帽子を被った男？の声が聞こえる。

『さあ、お前の罪を数えろ』

『うるせえ』

帽子の男がバイクから降り、犯人と対峙する。犯人が銃を構えて撃つよりも早く、帽子の男は犯人の持っていた銃を蹴り飛ばす。

『寝ている』

『がっ』

そして一瞬のうちに犯人は頭を蹴られ気絶する。

『あなたは一体誰なんですか』

ヘリがとうとう帽子の男と犯人がいる場所にたどり着き、司会がそう尋ねる。そこで初めて帽子の男の顔が映し出される。帽子の下に隠された顔はまるで骸骨の様な顔だった。

『オレの名はスカル』

それだけを告げるとスカルは再びバイクに跨がり何処かへと去ってしまう。

『ようやくヒーロー達が駆けつけて来ました。しかし、彼、スカルは一体何なのでしょう。この街の平和を守る新しいヒーローなのでしょうか。今後その正体や目的が分かり次第、番組内でお報告します。それではまた次回で会いましょう』

s
i
d
e

o
u
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3755v/>

高みを目指して

2011年9月27日00時15分発行